

令和元年度 玄海みらい学園 学校評価結果

1 学校教育目標 みらいへの挑戦 ～GO up～	2 本年度の重点目標 ①義務教育学校の特性を活かし、全職員が9年間の学びと育ちを意識した学校づくりのさらなる推進。 ②生徒理解に基づいた生徒指導の充実と自主・自立の気概ある児童生徒の育成の推進。 ③あいさつと歌声が響く学校づくりの推進。
---------------------------------------	--

達成度 A: ほぼ達成できた
B: 概ね達成できた
C: やや不十分である
D: 不十分である

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	○学校運営方針	学園教育目標の周知	・児童生徒はもとより、保護者、地域に継続的に教育目標の周知を図り、広く認知度を80%以上になるように設定する。	・学校便り、HP、連絡メールなどへの掲載と校内への掲示を行う。 ・学校教育目標の具体的な行動になるように、各学級で学級目標を設定する。	A	・学校便り、HPメールなどについては、予定通りに掲示を行うことができた。 ・学校教育目標と照らし合わせ学級目標を設定し取り組むことができた。	・次年度についても学校便りをはじめ、HPなどの媒体を通して広く周知を図るよう取り組んでいきたい。 ・学校教育目標を理解し、各学級の目標に落とし込み、学校全体で取り組む内容として重要視していきたい。
教育活動	●学力の向上	基礎学力の定着と応用力の伸長	・国語、算数、数学を中心とした基礎学力の定着を図り、全国学状や県学状のポイントを昨年より向上させる。 ・学習基盤を整備し、主体的に学習に取り組む児童の割合を増やす。	・「授業づくりのステップ1・2・3」を活用した取り組みをどの学年においても実践する。 ・校内環境を整備し、基礎的な読解力を育む場を提供する。 ・家庭学習の手引きを配布し、家庭学習の習慣化を図り、保護者も交えて基礎学力の定着を進める。	B	・「めあて」「まもめ」「振り返り」をどの学年、どの教科でも実践するため、公開授業の指導案検討に全員が携わり共通理解を図ることができた。 ・学習委員会の児童が作成した言葉のクイズをみらいホールの大ホールで発表し、楽しみながら読解力を育む場を設けることができた。 ・家庭学習の手引きを年度当初に配布した。	・家庭学習を児童生徒が目的をもって取り組んでいけるよう、研究の専門チームがアイデアを出して、各家庭へ呼びかけていくようにする。 ・まとまった文章を読むことができるよう、メディアセンターとの連携を図るようにする。
教育活動	●志を高める教育	海洋教育を通して主体的に学び、積極的に発信できる児童生徒の育成	・地域に欠かせない海に関する学習を全学年で進める。 ・児童生徒自身で現状を調べ、未来へ残していくべきことを保護者や地域、他校や他県との交流を通し発信する力を育成する。	・総合的な学習を主にし、各教科の中で横断的なカリキュラムを作成し、各学年の系統的な取り組みを実施する。 ・学習してきた内容を学校の中だけでなく、保護者や地域だけでなく他校や国内の人と交流の場を設定し、情報発信を行う。	A	・児童生徒の6割が学習に意欲的に取り組んだことがわかった。 ・学びの成果を表現することで、達成感を味わうことができた。 ・保護者の、海洋学習の取組への理解が深まっていることがわかった。	・今年度の取組内容を確実に次年度に引き継ぎ、さらに系統的なカリキュラムになるよう見直しを図りたい。 ・教職員間の意識や取組の温度差を解消すべく、校内組織(海洋教育委員会)を効果的に活用したい。

②生徒理解に基づいた生徒指導の充実と自主・自立の気概ある児童生徒の育成の推進。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○特別支援教育の充実	児童生徒一人一人の理解や個に応じた指導の改善	・一人一人を理解し適切な支援を行い、二次障害の予防に努める。	・児童生徒の困り感を特別支援、生活指導、教育相談という3つの面から判断し、適切なケース会議を開いて支援の在り方などを探り実践する。 ・関係機関と連携し、対応策について共通理解を図り、個に応じた指導に生かす。	A	・個に応じた丁寧で細やかな支援と指導のために、関係職員が連携して実践したことで、目標に近づいた。 ・前期後期の違いを超えた当事者感を共有するための共通理解を深めたい。	・今年度同様に、連携を深めるためのケース会議を開くことで、支援の質を高める。 ・支援対象となる児童生徒の紹介や報告を丁寧に行うとともに、前期後期の枠を超えて、全職員一丸となった指導・支援に取り組む。
教育活動	○生徒指導の充実	児童生徒一人一人を大切に、受容と共感的理解に基づいた生徒指導の充実	・基本的な生活の習慣を身に付けさせる。交通ルールを順守し、交通事故0を目指す。 ・特別支援教育や教育相談と連携して生徒指導を進めると共に、開発的な生徒指導を充実させる。	・生徒指導協議会を充実させ、名札、挨拶、言葉遣い等、基本的な生活習慣が身に付くよう、全職員が同じスタンスで指導に当たる。 ・交通安全を充実させる。 ・児童生徒会活動を活性化させ、主体的に活動できるよう支援する。	B	・生徒指導協議会を定期的に行い、教職員が同じスタンスで児童生徒と向き合うことで一定の効果はあった。 ・主体的に活動する場面では、自ら進んでといった行動は不十分な面が見られた。	・義務教育学校として今後も共通理解を図り、同じスタンスで生徒指導に取り組む必要がある。アンテナを密にし、開発的な生徒指導を展開していかなければならない。
教育活動	●心の教育	自主的、自立的に物事に挑戦しようとする児童生徒の育成	・異学年との交流を適し、協力して実践的な態度や思いやりの心を育て、自己評価の割合80%以上を目指す。	・1～9年生の縦割り活動を学校生活や学校行事に取り入れる。 ・高学年が低学年をサポートする体制をつくり、高学年は低学年を慈しみ、低学年は高学年に憧れの念を抱く心を育てる。	B	・縦割り遊びや縦割り掃除を通して異学年の交流を図ることができた。学校行事において各学年の発達段階に応じた役割分担し、協力して取り組むことができた。 ・上級生としての自覚を高める手立てが必要である。	・次年度も縦割り活動を継続し、交流を深めたい。前期と後期の連絡を密に取り、協力して行事に取り組めるようにしていきたい。
教育活動	●いじめの問題への対応	いじめのない協力的な人間関係づくり	・縦割り活動を活かしながら、互いの存在を大切にできる人間関係づくりを構築する。 ・特別活動や総合的な学習の時間を利用して、人権集会や人権教室を行う。また教科の学習の中で、差別を自らの事として考えることができる人権学習づくりを推進する。	・学校行事等を通して、協力体制をもたせ、よりよい人間関係づくりを構築する。 ・児童生徒連絡協議会や教育相談週間を設け、支援や配慮を要する子に対する共通理解や手立てを図る機会とする。 ・GWT(グループワークトレーニング)や学び合い活動を取り入れ、互いの理解を確かめ合いながら、「わかる」「できる」喜びを味わわせる。	A	・義務教育学校の特性を活かし、学校行事や縦割り活動・縦割り掃除など、学校生活全体において実施することができた。 ・年8回の人権集会を低・中・高学年に分かれ、児童の発達段階に合わせて実施することができた。	・次年度も人権集会は実施していく。さらに、取組の内容や児童の様子などを、学園内に掲示したい。人権集会や教科等の学習を計画的に行い、児童生徒の人権意識を高めるようにする。 ・児童生徒連絡協議会や教育相談週間を定期的に設け、支援や配慮を要する子に対する共通理解や手立てを講じる。
学校運営	●健康・体づくり	体力の向上	・自力登校を促し、バス停や学校まで歩いたり、自転車を用いたりして登校する児童生徒の割合を90%以上にする。 ・昼休みの体を動かす遊びを推奨し、基礎体力の向上を図る。	・自力登校の意義を児童生徒はもとより、保護者にも周知し、少しでも自分の足で登校することを意識させ、体力の向上を図る。都合により、送迎してもらった場合でも、所定の場所に乗り降させ、そこから歩いて登校することを呼びかける。 ・昼休みには体育館や運動場の使用割り当てを決め開放する。また、校内持久走大会を計画・実施し、体育の時間や休み時間に運動場を走ることを呼びかける。	A	・アンケートでは、子どもが8割、保護者が9割の割合で自力登校、立腰をしているという結果だった。委員会などの児童生徒間での呼びかけの結果である。前期課程では持久走大会を実施し、後期課程では体育でランニングと強化トレーニングを取り入れることで体力の向上に努めることができた。	・継続的に自力登校、立腰活動を行わせ、基礎体力を向上させていく。 ・体育の授業等でさらに体力向上できるように工夫して授業を行っていく。

③あいさつと歌声が響く学校づくりの推進

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	○母校の誇りづくり	あいさつと歌声が響く学校	・挨拶運動を活性化させ、自ら挨拶のできる児童生徒の割合80%以上を目指す。 ・行事等で「歌声を声高らかに堂々と歌う」児童生徒の割合80%以上を目指す。	・生活改善委員会を中心とした挨拶運動の実施をするなど、児童生徒会活動を促進させる。 ・全校で行う式や集会の際に、生徒主導で校歌を歌う場を促進し、主体的に歌う児童生徒を育てる。また、体育大会や卒業式などの学校行事の前には、生徒会が放送などを利用して歌う意欲を高め、各クラスと連携しながら全校的に練習する場面をつくるようにする。	B	・儀式や全校朝会の際に、主体的に校歌を歌う児童生徒が育ってきた。また、各クラスでの歌声が大きくなっていった。	・今年度は、校歌を5番まで歌う機会が少なくなってきたと思われる。機会あるごとに、校歌を始め、歌声が響く働きかけを今後も行う。

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策
教育活動	○教育の質の向上に向けたICT利活用教育の推進	ICTを活用した授業の実践	・ICT機器の利活用の更なる推進を図る。 ・ICT利活用推進の割合を80%以上を目指す。 ・特別支援を要する児童生徒への視覚教材の推進を図る。	校内にあるICT機器活用のさらなる充実を促進し、授業でのより効果的な活用を促す。 ICT支援員と連携し、特別支援の児童生徒の特性に応じた使用方法を探っていく。	B	・ICT機器の授業での活用についてはほぼ授業担当者に任せる形だった。各職員各自に工夫をされていたようだった。 ・特別支援の児童生徒に対しても担当教員に任せきりだった。	・授業での効果的な活用例を職員研修で短時間でもいいので紹介できればスキルの向上につながると思う。
学校運営	○開かれた学校づくり	保護者や地域の方々の学校行事や学校運営への参加促進	・HPに学校行事の様子や、各種便りを掲載し、情報発信を充実させる。 ・海洋教育等の学習効果の発表と学校公開日を重ね、地域に発信する授業を行う。	・定期的HPの更新を行ったり、地域の広報欄に学校便りコーナーを設置し、広く発信を行う。 ・海洋教育や学力向上を軸に、地域の人材を交えた学習活動に取り組み、情報発信を行う。	B	・HPの更新については定期的に行い情報発信を行うことができたが、地域の広報欄については改善の余地が必要である。 ・海洋学習については、地域の特性を活かし、学習した内容を広く発信することができた。	・HPのリニューアルに伴い、もっと見やすく分かりやすい情報を発信できるように努めていきたい。 ・海洋学習については、地域に根差した取り組みを今後も継続し、発信できるようにしていきたい。
学校運営	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	校務等の効率化の促進	・学校全般において業務改善を行い、教職員が児童生徒と向き合える時間を確保する。 ・全職員の残業時間を45時間以内にする。	・校内LANの利用促進を行い、分掌事務の軽減を図る。 ・タイムマネジメントを行うとともに、文科省の定める残業時間や定時退勤日の推奨や部活動の負担軽減を進める。	B	・情報の共有を図り、これまでの財産を活用し、分掌事務の軽減を図る必要がある。 ・1学期よりも2学期の方が働き方改革の意識が高まり、残業時間や定時退勤日の推進が意識されるようになった。	・効率的に情報の共有を図り、分掌事務の軽減を行い、児童生徒と向き合える時間を確保していく。 ・残業時間45時間を確実にこなせるよう行事の精選を図っていく。

4 本年度のまとめ・次年度の取組

学校教育目標「みらいへの挑戦～Go up～」の認知度は高く、ことあるごとに保護者や地域に発信してきた成果が表れていた。また今年度は、県指定の学力向上推進地域指定を受け、全職員で学習スタイルの構築を行いそれをもとに授業に取り組み、前年度より成果を上げることができた。海洋教育についても積極的に取り組むことができ、学園として学年段階を越えた系統的な活動を行うことができた。さらに、深化させるためには学習してきたことを発信する力を養うとともに、玄海町として地域の特性と良さを広く伝えられるようにしていきたい。課題として、今年度取り組んできた校内研究をさらによいものにするための方策が必要である。また、児童生徒が自主的に物事に取り組む経験を積むことで達成感を味わわせる必要がある。

●は共通評価項目、○は独自評価項目